

軍事史学

第44巻 第3号

巻頭言

文民統制の難問

田母神航空幕僚長の更迭事件で、あらためてシベリアン・コントロール（文民統制）をめぐる論議が浮上した。

従来の論議では、自衛隊の総指揮官である首相―防衛大臣を補佐する内局官僚（青広組）が、陸海空三自衛隊の制服組を「虎の威を借りる」形で押さえつけてよいのか、という問題提起が多かった。今に制服組の不満が爆発するぞ、と予告する人もいた。

日本の実務処理では、幕僚監部の原案を内局がチエツクする仕組みだが、かつて旧大蔵省から内局へ出向勤務した経験から、私は文民統制を厳格に実行するのは、組織人の本性に反する過酷な仕事ではないかという疑問を持った。

つまり外に向けては一体だが、家族のなかに必ずしも喜怒哀楽を共有できない異質の集団が同居しているようなもので、少数の青広組にはそのストレスに堪えられぬ人も出てくる。親元へ帰る出向者は別として三〇年以上も同居せねばならぬプロパー組が、緊張感を失い、馴れあい傾いていくのはやむをえないところもある。

文民トップへの服従についても、疑念がないわけではない。防衛大臣はころころ変わるし、自衛隊否定、日米安保反対を唱えてきた旧社会党出身の村山首相が一夜にして両方とも容認へ変針したかと思えば、村山談話へ急転というぐあいだから、ついて行けない人もいよう。

政軍関係とか文民統制は人類の歴史を通じる永遠の課題だろう。環境条件がたえず変化することもあって、この難問に対する一義的な答はまだ見つからない。

しかし内外の軍事史を研究し、先人の成功や失敗から必要な教訓を引き出すことで、共通の問題意識を育てるのは可能だと私は信じたい。（秦 郁彦）